

平成22年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 トラフグ

学名 *Takifugu rubripes*

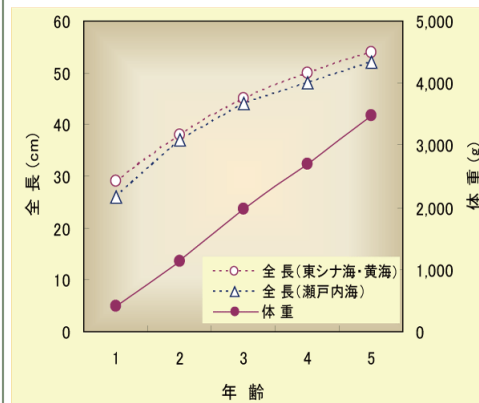
系群名 日本海・東シナ海・瀬戸内海系群

担当水研 瀬戸内海区水産研究所
西海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 10歳
成熟開始年齢: 雄2歳、雌3歳
産卵期・産卵場: 春期(3～6月)、能登島、若狭湾、福岡湾、有明海、八代海、関門海峡周辺、布刈瀬戸、備讃瀬戸
索餌期・索餌場: 周年、日本海、東シナ海、瀬戸内海、黄海
食性: 仔魚後期までは動物プランクトン、稚魚は底生性の小型甲殻類、未成魚以降はエビ・カニ、魚類等
捕食者: 不明

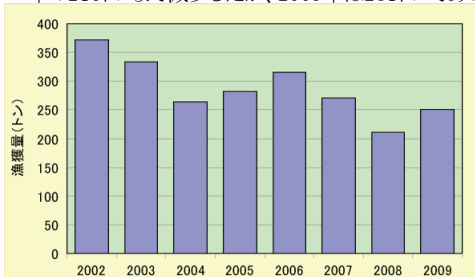


漁業の特徴

産卵場周辺では、3～6月に2歳以上が定置網、釣り、敷網によって漁獲され、成育場周辺では、7～1月に0歳が定置網、小型底曳網、釣り、延縄によって漁獲され、沖合や水道域では、12～3月に0歳以上が延縄によって漁獲される。

漁獲の動向

長期の漁獲量データは存在しない。下関唐戸魚市場(株)における取扱量を長期の漁獲量指標とすると、1971～1993年は610～1,727トンで推移したが、1994年から急激に減少し、1997年以降106～313トンで推移し、極めて低水準にある。本系群の漁獲量は2002～2004年に373トンから263トンに減少後、2006年の316トンまで増加し、2008年の210トンまで減少したが、2009年は251トンであった。



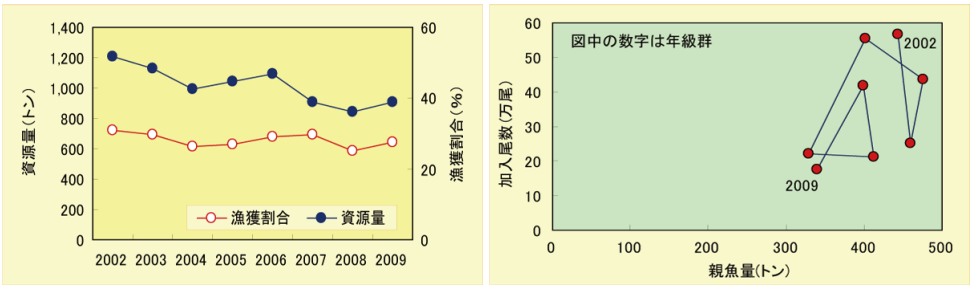
資源評価法

2002～2009年の資源量は、日本海・東シナ海、瀬戸内海(太平洋南を含む)の年齢別漁獲尾数を合算し、自然死亡係数を0.25としてコホート解析(Popeの近似式)により推定した。

資源状態

資源量は2002年の1,209トンから変動しながら減少傾向で、2008年は840トン、2009年は911トンと推定された。漁獲物の大半は0～1歳でFとYPRの関係から成長乱獲であることが示唆された。2002年以降、SSBおよびRPSが大きく変動しながらも減少傾向にあることが資源動向減少の大きな要因と考えられる。人工種苗の混入率は平均0.20、添加効率は平均0.09と推定された。Fと放流尾数を変化させた将来予測から種苗放流は資源を下支えしていると考えられた。

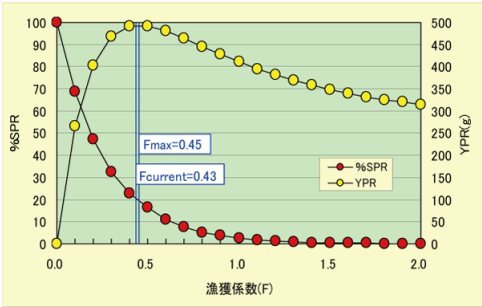




管理方策

2006年以降RPSが減少傾向であることから、今後、SSBが減少し、資源回復が困難な悪循環に陥ることも懸念される。このことから、全ての年齢を対象に漁獲量を緊急に削減し、資源回復に努める必要がある。近年、RPSは低水準で人工種苗によって資源が下支えされていることから、資源回復には最適放流への転換による種苗放流の効率化も重要である。

	2011年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	155トン	0.70Fcurrent	0.30	22%
ABCtarget	128トン	0.8・0.70Fcurrent	0.24	19%



資源評価のまとめ

- 資源水準は低位、減少
- 漁獲物の大半は0～1歳でFとYPRの関係から成長乱獲であることが示唆された
- 2002年以降、SSBおよびRPSが大きく変動しながらも減少傾向にあることが資源動向減少の大きな要因と考えられる
- 種苗放流は資源を下支えしていると考えられた

管理方策のまとめ

- 全ての年齢を対象に漁獲量を緊急に削減し、資源回復に努める必要がある
- 人工種苗によって資源は下支えされていることから、資源回復には最適放流への転換による種苗放流の効率化も重要である

執筆者: 片町太輔・石田 実・塚本洋一

資源評価は毎年更新されます。